

## 【震災遺構共通コンセプト】

### わたしたちの記憶を紡ぐ 未来のいのちへつなく 母なる海とともに

記憶を言葉にして紡いでいく。紡ぎつづける事が未来のいのちを守ることにつながる。

わたしたちとは、震災で亡くなられた故人、今もなお行方不明の方々。そして今を生きるわたしたちを指している。

わたしたちの記憶とは、震災の記憶だけではなく、大地震がくる1分前、1秒前まで日常生活の中にいた私たちの記憶であり、故人、行方不明者を含むすべての人々の記憶。

わたしたちは、その時がくるまで、ごくごく普通の生活の中にいた。ふつうに仕事をしていたし、ふつうにご近所さんと何気ない会話を楽しんでいた。いつもどおり犬の散歩をしていたし、いつもどおり子供たちの帰りを待っていた。みなが自分の人生を生きていた。大地震がくる、その時まで。そして津波が襲い来るその時まで。

その普通の生活が一瞬にしてどこかへ吹き飛んでしまった。失ったものは様々ある。けれども、どうしてそれは失われなければならなかったのか。それを問い続けていかなければならない。それが出来るのは、今を生きているわたしたちだけ。私たちがあの日の記憶を言葉にして紡いでいく。故人の記憶を伝えていく。それは思い出をカタチにすることかもしれないし、形として遺ったモノから記憶を呼び起こすことかもしれない。どう残すかではなく、未来へ何を伝えたいか問うことではないか。

過去の災害（貞観三陸沖地震、慶長三陸沖地震など）は記録されてきた。けれどもそれが活かされなかったのは何故か。それは記録にとどまってしまったことにある。記録はされても、記憶（伝承）されてこなかったことの恐ろしさに深く気づかされたのが大震災であった。だからこそ、未来へのいのちをつないでいくために、そして震災前にあった普通の生活、当たり前前の日常を取り戻すために、わたしたちの記憶を紡ぎ続けていかなければならない。太古から海とともに生き、川の恵み山の恵みにあずかりこの地で暮らしてきたように、これから先も変わらぬ風景を紡ぎ続けていこう、わたしたちの記憶とともに。

#### ■展示が担うもの

- ・災害にあわれた方々が、何故を問える空間であること（※市内全域が被災したのであって、多くの市民が様々な記憶を抱えたままであり、その記憶を引き出さなければならないことを忘れてはならない）
- ・大震災という事象から学んだ減災の心構えについて、石巻市民に向けて、さらに国内・世界に向けて発信し続けること
- ・歴史を伝えること
- ・地震の恐ろしさを伝えること、地震から起こる津波の恐ろしさを伝えること
- ・津波火災の恐ろしさを伝えること
- ・避難の判断の大切さを伝えること（自分で考え判断（行動）できる市民を育てるための学びの場）
- ・モノが伝えるチカラ（モノは人の記憶をよびおこす→震災前の人々の暮らしや日常、さらには被災者が抱えている思いを想像して欲しい→何かを感じて自分の記憶に紡いで欲しい）

#### ■課題

- ・記憶をつないでいくモノをどう収集していくか。

#### ■キーワード

「記憶」「人生の記憶」（故人ほかすべての人を含む）